



# 教皇様の聲

# 225 号

Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticano の転載許可済 ©1999

## 救いをもたらす洗礼の偉大さ

主の洗礼の祝日に

★ 本日の主の洗礼の祝日で降誕節は終わりです。降誕節はイエズスがいよいよこの世に「登場」する季節です。ベトレヘムで誕生した時、「全ての被造物の長子」であり「目に見えぬ神」(コロサイ1・15参照)である方の見える姿が、幼子となって現われました。ご公現では、地上の全ての国民が待ちわび、捜し求めた贈り物、人知れず歴史が向かいつつある目的地を照らします光として示されます。そして本日の典礼では、人間の一人としてヨルダン川で「汚れのない頭を洗礼者ヨハネの前に下げて洗礼を受け、人類を隷属から解放された」(ビザンティン典礼、EE, 3038番)のです。こうしてイエズスは「司祭、預言者、王としての塗油を受け」、聖別されたしもべとなり、「全ての人が彼を貧しい人に良い知らせを伝えるため遣わされた救い主として認めました。」(イタリア・ミサ典書の序唱より)

このような段階を経て、キリストは次第により深く、より内的な仕方で自らを表わされます。

★ 本日は、世界の様々な国から来た20人の子供たちが洗礼を受けます。この秘跡は神の恩寵という神秘の賜物を更新し、消えない印章を靈魂に与え、新たな誕生をもたらします。「その方を受け入れた人々にはみな、神の子となれる力を授けた。彼らは…神によって生まれた人々である。」(ヨハネ1・12~13)

聖化する恩寵は子供たちの原罪をぬぐい去り、洗礼を通じて対神徳と聖霊の賜物を注ぎ込むと同時に、キリストの神秘体である教会の一員としてくれます。

最初の秘跡、そして救いに最も必要な秘跡である洗礼は偉大なるかな！洗礼はキリスト者の生命のいしずえであり、他の全ての秘跡と、永遠の生命への入り口です。このシステナ礼拝堂のミケランジェロのすばらしいフレスコ画が私たちに語りかけているように。

洗礼の重大さに気づくなら、生まれたばかりの子供たちにぜひとも洗礼を受けさせるでしょう。そうすれ

ば、後の幼年期・青少年期がまことの要理教育入門期となってキリスト教生活が始まり、次第に信者の共同体に加わっていくことができるでしょう。

★ ご両親と代父母の皆さん。これから洗礼を受けるこの子供たちは、自分たちの受ける秘跡が計り知れない価値のある賜物であることをよく理解し、考え、認識することが必要です。今はまだ子供たちにはわかりませんから、彼らを助けてキリスト教の真理の最初の先生となるのは、皆さんの責任です。

子供たちの声に耳を傾けてください。信仰は神の御言葉を聞くことから始まります。聞くことは、他のあらゆることと同様、まず家庭の中で学ぶ心構えです。聞いてもらえる人は聞くことを学び、愛される人は愛することを容易に学びます。

この子供たちが福音に忠実な者・喜んで神と兄弟姉妹を愛する者となるよう助けてください。キリスト教的聖性の道に沿って、言葉と模範で導いてください。

親である皆さんの使命は、肉体の生命を与えることにとどまりません。皆さんは子供たちを信仰と霊の王国に誕生させるよう召されています。

ナザレトの聖家族に習いましょう。祝された処女マリアと聖ヨゼフが常に皆さんの家庭を守ってくださるよう祈りましょう。

この大きな祝日に、この子供たちは洗礼を受けて神の養子となります。先ほど読まれた福音の中の御父の言葉が再び聞こえます。「どの子もみな、私の愛する子、私の心にかなう者である。」

両親と代父母の皆さん、自分たちの使命を知る大人のキリスト信者の皆さん。御父の勧めが再びこだましています。「彼に聞け。」(マルコ9・7)

神の御母・教会の御母マリアと全ての聖人たちが、大きな使命に立ち向かう皆さんを助けてくださいますように。(1996・1・7、システナ礼拝堂での主の洗礼のミサ中、幼児洗礼式に当たってのお話)

## 回勅&lt;信仰と理性&gt;の要約

## 信仰と理性：真理に至るための二つの翼

「信仰と理性は人間の精神を真理の観想にまで導く二枚の翼のようです」。ヨハネ・パウロ 2 世の回勅『信仰と理性』の冒頭のこの言葉は、そのまま生命の基本的な問題と人類の歴史、つまり回勅の中心的な内容を要約していると言えます。ヨハネ・パウロ 2 世は人間の理性に真理を知る能力があることを弁護し、信仰と哲学が再びその深い一致を見出すよう求めています。

## 信仰と理性

文化や民族や宗教の違いを超えてすべての人間は等しく、自分のアイデンティティーや起源、行く先、悪の起源、死後に関する謎についての疑問を投げかけます。言い換えれば、自分の生活に意味を与える最終的な真理を求めます。しかし、人間はその真理を手に入れる能力がないと考えているので、無駄な探求を続けていると言えます。

ヨハネ・パウロ 2 世はこのような状況を考えて 13 番目の回勅『信仰と理性』(1998 年 10 月 15 日に公表)を書きました。すべては意見に過ぎない、すなわち真理はコンセンサスの結果である、という考え方に現われる現在の文化の状況に、教皇は待ったをかけたのです。不確実性という雰囲気蔓延し、全ての人に影響を与えています、特にこの状態にさらされているのは新しい世代の人々です。若い人々には支えにする言及点がないか、あっても「価値あるものとして示されているのははかない事柄」です。そこで、教会は「真理について熟考する必要を主張したいのです」。

## 思い切って根本的な問いを投げかける

真理をより深く知るために人間が有する数々の手段の中で、哲学は際立っています。「哲学は人間が事物の理由とその目的について尋ね始めた時に誕生し、発展してきました」。しかし最近になって、哲学は「人間の真理を知る能力を支えとせず、その能力の限界や条件づけを好んで強調しています」。「哲学者の間だけでなく現代人の間に、人間の偉大な認識の手段に対する漠然とした不信が起こってきました。誤れる慎みから部分的かつ一時的な真理で満足してしまい、個人的社会的な人間生命の意味や最終的な基礎について根本的な問いを發することがなくなりました」。

ヨハネ・パウロ 2 世は文化人の間に反響を引き起こす問題を提起しています。なぜさまざまな現代哲学の動きは理性の弱さを強調し、全般に広がった懐疑的な態度を事実上みずから広めることになったのか？教皇はもう一つの回勅「真理の輝き」を通して、間違っ

て解釈されている倫理的なくつかの真理に人々の注意を引きましたが、『信仰と理性』においては、「真理そのもの」と信仰との関係における真理の「根拠」に人々の注目を引きたいと願っています。教会は、「哲学が信仰の理解を深めるために、また福音の真理をまだ知らない人々に伝えるために欠くことの出来ない助けであると主張します」。

こうして、レオ 13 世の回勅『エテルニ・パトリス』(永遠の御父)(1879 年) から 120 年後に、『信仰と理性』は信仰と理性との関係を新たにテーマとして取り上げ、両者の分離がもたらす否定的な結果を示しています。逆説のようですが、理性の最も貴重な支えはキリスト教信仰であり、他方、信仰は信仰の行為の十全な自由を正当化するために、真理を基礎とした理性が必要であると教皇は主張します。

## 信仰からくる知識

第 1 章では、啓示とは神ご自身が人間に提供される知識であることが述べられています。「創造主を知り得るという本性上の能力を備えた理性に固有な知識のほかに、信仰に固有な知識があります。」両者が混同されることも、一方が他方を不必要にすることもありません。啓示が秘義を提示すると、理性は自力で秘義を究めることができず受け入れるべきであるという理由を直感します。

こういう展望がないと、人間存在という神秘は解決できない謎になってしまいます。「人間は苦痛や罪なき人の苦しみや死といった劇的な諸問題に対する答えを、キリストの受難と死と復活の秘義から輝き出る光を受けずに、見つけることができるでしょうか」。

第 2 章で、聖書のテキストの特異性は理性による知識と信仰による知識との間にある深く不可分の一体性を強調することであると述べています。この一体性を基礎にして、聖書の思想は真理を認識するための王道を発見しました。すなわち、自らの存在に関する根本的な疑問に答えるために人間が歩むべき道を完全に知りたいのなら、神が提供する知識を無視することはできないということです。

## 信じるために理解する

第 3 章で、教皇はすべての人間が知りたいと望んでおり、その望みの対象がまさしく真理であるという点から話を進めます。理性を使って常にすべての事柄について問いかける人間は、自分の存在に関する知識、すなわちその本質から「普遍的」ですべての人にとって

「常に有効で絶対の」、言いかえれば決定的な真理に到達することができます。「魅力的でありうるけれども満足させてくれない仮説」では役に立ちません。

人間は真理を探求しますが、「その探求は部分的、科学的な諸真理を征服するだけにとどまりません。その探求は、それらの奥にあって生命の意味を説明できる真理へと向かいます。だから、絶対者においてしか答えを見出すことができないのです」。この真理は理性の働きによるだけでなく、他者の証言を信頼することによっても到達できます。これは普通の人間の生き方です。「人間生活において、単に信じて受け入れる真理の数は個人的に確認した結果として受け入れる真理よりも遥かに多いのが現実です」。

### 信仰の理解

「啓示によって到達できる真理は同時に理性の光に照らしても理解されるべき真理」ですから、哲学の役割は非常に大切です。第4章では、キリスト教がどのようにして古代哲学思想と関係を持つようになったかについて、歴史、哲学、神学の面から概論が提供されます。「初代の信者は、異教徒の理解を促すにあたって〈モーゼと預言者〉だけに言及するわけにはいかず、神に関する自然の知識と人間各自の道徳的良心の声に訴える必要がありました」。

本章は教会の教父たちの模範を示し、彼らが信仰の宝を支えに「古代の偉大な哲学者たちの含蓄的・初歩的な状態の思想を明確化することができた」ことを述べます。中世には、あらゆる人に信仰の内容を理解させるための努力が傾けられました。トマス・アクィナスの貢献は永遠の今日性を備えています。「真なるものは、誰がそれを言ったにしろ、全て聖霊から来る」という原理を基に、聖トマスは信仰と理性との間の完全な調和を示しました。「信仰は理性を恐れるどころか、理性を求め、理性を信頼します」。

### 偽りの慎み

近代に入ると、信仰と理性がどんどん分離し、それに伴って哲学の役割が変わってきました。知恵と普遍的な知識は人間の知識の一部分に過ぎないと考えられるほどわずかになりました。「哲学者のある者は真理そのものの探求をあきらめて、哲学唯一の目的は主観的な確信や実利実用であると考えようになりました」。

教皇によれば、「近代哲学思想のかなりの部分はキリスト教の啓示からどんどん離れて行き、啓示と対立する立場をとるようになったと言っても」言い過ぎではありません。これらの中のある哲学は「人類全体にとって全体主義的・トラウマ的(病的)な体系に帰着してしまいました」。

信仰と理性との分離が生み出したこのような結果を

見ると、「信仰も理性も共に貧弱になり、互いに力をなくした。理性は啓示の寄与を失って最終目的を見失う危険を宿す二義的な道に入り込み、信仰は理性を失って感情と経験を重視するあまり、普遍的な提起であることをやめる危険に陥った」ことが明らかになります。教皇はさらに踏み込んで、次の点を強調しています。「信仰は弱い理性を前にしてより鋭くなるというのは幻想であって、逆に、神話や迷信に過ぎないとされる重大な危険が増します。同じように、大人の(成熟した)信仰を目の前に置かぬ理性は、存在の新しさと重要性へと向かう動機を失ってしまいます」。

### 哲学の必要性

第5章では、哲学の問題に関する教導職のいくつかの宣言が示されます。「教会は固有な哲学を提示したり、他を無視して特定の哲学を祭り上げたりはしません。しかし、「ある種の哲学体系の中に見られる信仰と両立しない事柄について指摘する義務があります。」また、「どの哲学であっても真理全体を一人占めにできないし、人間存在、世界、人間と神との関係について完全な説明を提供できないことは」明らかです。

次いで、信仰主義や過激な伝統主義、合理主義に関する教導職の判定を振り返ります。「いずれも具体的な哲学の命題についてというよりも、理性的な知識の必要性、従って信仰の知識のために哲学が必要であることを述べています。」

教会が哲学を励まして自らの使命を取り戻すよう勧めるにもかかわらず、教皇が「驚き嘆きつつ」確認するように、神学者の中にも哲学研究に関心をもたない人がいます。そこで、教皇は「哲学と神学間の調和ある効果的な関係を修復することを目的として」いくつかの言及点を提示します。

### 哲学と神学との調和

そこで第6章では、様々な分野で哲学的な知識と神学とが保つべき関係の必要性について述べます。中心となる考えは哲学の貢献がなければ特定の神学的内容を説明することができないという点です。教皇は教会が取り入れた哲学の遺産が普遍の価値をもつと明言しています。「福音化の使命を果たすため最初に見つけたのがギリシャ哲学であったとは言え、他の哲学思想を排除したことを意味しません」。しかし「この遺産を拒むならば、それは時と歴史の諸々の道に教会を導く神の摂理の計画に反することになるでしょう」。

教皇は具体的に、古くから宗教と哲学の伝統をもつインドや中国、日本のような種々の場所における信仰のインカルチュレーション(文化の受容)に触れています。「この豊かな遺産から信仰に合致した、そしてキリスト教思想を豊かにする諸要素を取り上げることこ

そ、今日のキリスト者の仕事です」。回勅はこの出会いを実り多いものとするためのいくつかの基準を示しています。その一つは、人間精神の普遍性です。人間精神の要求は、いかに異なった文化においても同じであるからです。

ヨハネ・パウロ 2 世は、フィードバック (相互の影響)こそ信仰と理性の関係を修復する道であると主張します。「神学の出発点と源泉は常に、歴史の中で啓示された神の言葉でなければなりません。そしてその目的は世代を通して段階的に深められてきた啓示の理解以外にありません。他方、神の言葉は真理そのものですから、人間的な面での真理探求、つまり哲学をよりよく理解するのに役立ちます」。

この道が豊かな実りを結ぶことは、大勢のキリスト教著者が、哲学の探求と信仰が提供する知識を組み合わせ調和させたという事実に見われています。教皇はその例として J.H. ニューマンや A. ロスミーニ、J. マリタン、E. ジルソン、E. シュタイン、V. ソロヴィエフ、P.A. フロレンスキー、P.J. カダエフ、V. ロスキーなどを挙げています。

### 意味を求めて

哲学と信仰の「言及点および照合点としての」啓示が第 7 章のテーマです。聖書には、人間と世界に関して哲学的に大変な価値のある見方を可能にする一連の要素が存在します。そこから、「経験する現実には絶対的ではない」という事実が理解できます。聖書に含まれているこの「哲学」の根本的な確信は、「人間生命と世界には意味があり、イエズス・キリストにおいて完成する実現へと向かっているということです」。

事実、「意味の危機」こそ、現代思想の最重要点の一つです。知識の断片化によって、意味の探求が難しくなっています。「存在の骨組みそのものをなすかのような膨大な量のデータや事実の間で生活しながら、大勢の人々は意味の問題を提起すること自体に意味がある

のかと問いかけています」。教皇の答えはまことに明らかです。「人間には、知識に関する有機的で統一の取れた見方をする能力があるという確信を確固として主張したい。これこそ、キリスト教思想がキリスト教の次の千年を通じて立ち向かうべき課題です」。

意味について対応しない哲学は、理性を単なる道具としての役割におとしめる危険があります。「哲学が神の言葉と調和するためには、何にもまして生命の最終的かつ包括的な意味探求が有する知恵としての面との新たな出会いを果たさなければなりません」。

### 真理と自由

これらの原理をもとに、回勅は簡潔な分析を行ない、現代哲学のある種の体系には限界があることを示しています。この種の現代哲学は、永遠の真理へと開かれることを拒んでいます。折衷主義、歴史主義、科学主義、実用主義、虚無主義は、真理の根本的な要請に開かれていないがために、信仰を説明するにふさわしい哲学ではあり得ません。「形而上的な展望のない神学は宗教体験の分析以上のことができません」し、「啓示された真理の普遍的で超越的な価値を首尾一貫した方法で表現することもできません」。

さらに教皇は、「存在を否定すると、客観的真理との接触を失うことは避けられず、その結果、人間の尊厳の基礎をも失ってしまう」と見えています。「真理と自由は共に歩むか、哀れにも共に死んでしまいます」。普遍的に有効な真理を知る可能性を信じることは、「不寛容の源ではなく、ペルソナとして人間同士が誠実に真摯な心で対話するためにどうしても必要なことです」。

結論の章で、教皇は本文で扱ったいくつかのアイデアを取り上げて次のように書いています。「今日、緊急を要することは人々に真理を知る可能性を見出させることです」。「今世紀末最大の脅威は絶望への誘惑です」。この危機の原因は、大局的に考える能力を失ったことにあるのです。

## 大聖年に向かって

典礼暦の新しい一年が始まり、教会は二つの偉大な秘義、托身(受肉)と贖いに焦点を合わせます。すなわちクリスマスと復活祭です。それは人間に与えられた「神の時」であり、こうして人間の仕事と日々は永遠という次元に向けて開かれます。

神が人となって時間の中に入ってこられた瞬間から、時の歩みは意味と方向性を持つようになりました。神によって造られ贖われた天地万物は、すでにキリストの過越の秘義が予見していたように、完成への道を歩んでいます。

これら全ては愛の計画ですが、そのまま文字通りに実現するわけではありません。自由、すなわち善と悪との激しい戦いの中で実現されるのです。全ての人々が聖マリアの模範に倣って神の計画に進んで協力するよう招かれています。聖母は人となられたみことばを受け入れて、新しいエバ、贖われた人類の母となったのです。

紀元一千年期の最後の年が始まりました。キリスト信者と全人類の目は今や目前に迫った大聖年へ、神の御子の托身の二千年目を祝う記念の年へと向いていま



ます。

1999年は、3年がかりだったこの歴史的・霊的イベントの直前準備の締めくくりに当たる年です。イエズス・キリストの年、聖霊の年に続いて、今年も父である神の年になりますので、皆さんもぜひとも隣み深い御父の住居への霊的巡礼を果たしていただければと思います。それは愛の改心、貧しい人々との分かち合い、兄弟姉妹との対話の道です。

それに関連して、私がローマ市民の皆さんに呼びかけているのは市内での福音宣教への協力です。聖年を視野において信仰を新たに、各人の生活の場で、仕事や勉学、労苦や苦しみの中にもキリストを運び伝える

ることです。

私はこれら福音宣教に携わって多くの家庭を訪問している宣教者の人々を励ますと共に、全ての働くキリスト者…労働者、教師、知識人、職人、商人…が仕事の中で、積極的な福音宣教に加わってくれることを望みます。(…)

信仰あふれる処女マリアに助けを祈りましょう。主が来られる時、私たちが無関心や高慢の中に閉じこもることなく、生き生きとした愛のうちに注意深く主を待ち受けていることができますように！(1998・11・29、御父の年の始まりを宣言する待降節第一主日のミサの後、聖ペトロ広場でのお告げの祈りにて。)

## 教皇さまの動き

●12・5 「倫理と法的一致」をテーマにしたイタリア・カトリック法律家連合の年次研究会参加者たちへのお話。「健全な自然法を土台にした立法こそ、確かな人権保障のための貴重で有意義な基盤と言うべきでしょう。」

●12・6 教皇さまはローマ市内の教会でミサを立てられた。お説教の中で、「人々が働き、苦しみ、学び、安らぐ所どこでも福音をもたらさなければなりません。福音宣教にとってどうでもよい状況などなく、あらゆる次元で人々を益することにつながらねばなりません。キリスト教共同体がふさわしい準備で大聖年を迎えるには、これ以外にありません。」

同日正午のお告げの祈りで、教皇さまは最新の回勅『信仰と理性』について言及された。「結論として、問題にしたのは真理についてです。信仰も理性も結局は真理に仕えるためのものですから。人間にとって、真理の探求が最も重要で必要不可欠であることを何度も繰り返し言わねばなりません。」「現代世界はあまりにも情報やニュースが飛び交いすぎて、自分はいったい何者で、どこから来てどこへ行くのかといった存在についての重大な問いかけを忘れてしまいます。哲学はこれら基本的な問いかけに由来します。信仰は恐れではなく、むしろ理性の働きを促すものです。」

●12・8 ローマのスペイン広場にある無原罪の聖母像へ恒例の表敬訪問。その後、サンタ・マリア・マジョレー聖堂に立ち寄り、個人的な祈りを捧げられた。

●12・10 世界人権宣言発布50周年を記念して、教皇さまは国連当てにメッセージを送り、全ての人のものであるべき基本的人権のいくつかを、今も重大な侵害を受けていることを訴えられた。

同日、教皇さまは第七回世界病者の日がレバノンのペイルート郊外にあるハリッサ聖母聖堂で開催される

と発表された。「レバノンではカトリックと様々なキリスト教共同体が共存し、また諸宗教の交差点となっています。この地での世界病者の日の開催は、病人、苦しむ人、疎外された人、貧しい人、権利を奪われた人々に注意を払いつつ、エキュメニズム活動を通じて教会一致を進めることが何よりも必要であると強く訴えています。」「病に伏す皆さん、父である神の御腕に身を委ねましょう。ご存じのように生命は父からの最高の愛の贈り物であり、私たちの責任ある選択は、全てこのことを確信して為されなければなりません。」

●12・13 お告げの祈りの時間に再び回勅『信仰と理性』について述べられた。「真理を探るのが困難な時もあります。真理を完全につかむことは不可能に近く、間違いを重ねる私たちには謙虚さと寛容が求められます。」「なかなか真理に到達できず、多くのことに確信が持てない時、それでも人は、どこでも通用する基本的な真実や原理原則が確かに存在することに気づきます。」「これらの真理こそ、考えること、存在すること、そして共存することそのものです。私たちが物事を伝えあい、探求し、誤りを認め、共に生き、愛することができるのも、それらのおかげです。経験科学は真理の存在を明らかにします。科学は私たちが部分的にでも真理をつかみ、誤りを克服しつつあることを示しています。だからこそ、科学知識は完全な真理に向かう一歩なのです。」「神から下り、キリストにおいて成就する啓示は、私たちに神とその救いの計画についてさらに深く悟らせてくれます。啓示は決して、理性の働きによって到達した真理と対立するものではなく、むしろそれを確証し、純化し、強めます。」

聖ペトロ広場に集まった人々と共にお告げの祈りを唱えた後、教皇さまは幼子イエズスのご像を持って集まった大勢の子供たちに祝福を送られた。

●12・15 夕方、教皇さまは大学教員と学生たちのためのミサを聖ペトロ大聖堂で立てられた。「罪によって人は神から離れてしまいました。しかし、回復不能の別離というわけではありません。神は人類に対し、やがて来る贖い主を待つようにと仰せになりました。」「皆さん、贖い主への待望は、日々真理を求める態度に表われねばなりません。真理は私たちを愛徳に導き、人間存在と社会の構造を変える力を持っています。」

●12・16 この日から教皇さまの新しいカテケージスのお話が始まった。テーマは父である神について。(こ

のシリーズについては、本紙で順次紹介の予定。)  
「私たちの考察の出発点は、イエズスが神の御子であり、御父を指し示す方であるという福音書の言葉です。イエズスの教えもわざも、その生き方も、全てが私たちが御父のもとに導きます。」「イエズスと御父との関係を最も如実に示すのは、イエズスの使命の頂点であり、信じる人々に新しい永遠の生命を与えるための基礎となった復活です。しかし御父と御子の交わりも、御子と信者たちとの交わりも、イエズスの死と栄光の秘儀を通じてもたらされます。」

## 私自身を神へのささげものとしよう

「私たちは東の空に星を見て、主を拝みに来ました。」  
ご公現の祝日である今日、私たちは人となられた神の御子と、東の国の博士たちに代表される地上の全ての民との幸福な出会いを祝います。

幼子イエズスを、長く待ち望んだ救いの王と認めた博士たちは、ひれ伏して礼拝し、象徴的な贈り物を捧げました。黄金と乳香と没薬です。(マテオ2・11参照)

博士たちのように、私たち一人ひとりも托身したみことばの前で、忠誠を新たにしよう招かれています。物をお捧げするのではなく自分自身を、神に喜ばれる聖なるいけにえとして差し出すのです。これこそ、神が私たちの所に来ることによって先鞭を付けられた、霊的な礼拝です。(ローマ12・1参照)キリスト者がこの世で、この世のために、キリストに贖われた新しい人類のしるし・クリスマスで祝われる愛の秘義の証人となるのは、まさにこうした日々の自己奉獻を通じてなのです。

兄弟姉妹の皆さん、荘厳な本日の典礼は、全ての信者をキリストの福音の勇敢な宣言者、救いのメッセージを告げる喜びあふれる使者とさせてくれます。敵意と敵対のある所に愛と兄弟愛をもたらしてください。生命が深刻な危険にさらされている所では勇敢に生命を守り、憎しみや疎外が支配する所では赦しと歓待の精神をもたらすよう努め、不和と権力の乱用、分裂と暴力のある所では、平和と正義を広めてください。

これこそは、托身したみことばの栄光をたたえる真の賛美と言うべきです。それらは世界が待ち望む希望のしるし、主に出会い、主に気づき、主を讃えるため

の手段です。けさ私は聖ペトロ大聖堂において14名の新司教を叙階しましたが、彼らは特にこの困難な使命に仕えるため召されています。私は兄弟の愛を込めて挨拶すると共に、彼らがたゆまず福音を告げ、変わらぬ愛と寛大さで、自分たちの司牧に委ねられた全ての人を贖い主である神のもとに連れていくことを願っています。

ご公現の大祝日は、自然に私たちの目を東方教会の兄弟姉妹たち(カトリックも正教会も含めて)へと向けさせます。その多くの人々は、今日もクリスマスを祝っています。

どうか降誕の秘義が、私たちのために処女からお生まれになった神の御子を讃える一つの賛歌の中で、さらに深く私たちを結び付けてくれますように。ベトレヘムで星が指し示した救い主を共に黙想し、対話と一致のきずなを強めることができますように。教会一致への取り組みは現代の全てのキリスト者の課題です。

紀元二千年期は、まさにこの共通の一致への願いの中に、将来への希望のしるしを読み取ろうとしています。人々に「調和の言葉」をかけ、「互いに愛し、互いの富を交換できることを感謝しあう兄弟姉妹たちによる宣言」(『東方の光』28番)を語るのは、キリスト信者の義務です。

「沈むことのない星」「昇る栄光の太陽」(前掲書)の御母マリアが、一致という課題に向かう私たちを助け、つねに優しく胎内の実りイエズス・人類のただ一人の贖い主を示してくださいませように。

(1996・1・6、主のご公現の祝日に。)

「教皇様の聲」ヨハネ・パウロ二世教皇の説教、書簡、講話等を解説なしにそのまま伝える月刊紙

■毎月10日発行 ■定価：送料とも一部186円 ■年内定期購読：送料とも一部2,087円

詳しくは、精道教育促進協会までお問い合わせ下さい。

財団法人精道教育促進協会 〒659-0093 兵庫県芦屋市船戸町12-6

TEL. 0797-31-3452・FAX. 0797-31-3448 口座振替：01130-8-72393 財団法人精道教育促進協会